

## 「教育激変」 2020年、大学入試と学習指導要領大改革のゆくえ

池上彰 佐藤優著：中公新書ラクレ

2020年度、教育現場には「新学習指導要領」が導入され、小学校に続き中学、高校と順次適用されていく。大学入試も従来の「センター試験」に代わって「大学入学共通テスト」が始まるが、なぜいま教育界は改革を迫られているのか。

本書は、東工大など8大学で教壇に立つ池上氏と、同志社大で教壇に立つ佐藤氏が日本の教育の問題点などについて忌憚のない意見を交わしながら解説。最終章では大学入試センター理事長の山本氏と鼎談で大学入試改革の真の狙いも語っている。

新学習指導要領では「何を学ぶか」「何ができるようになるか」とともに「どのように学ぶか」という指針が示されている。なぜ学び方を本格的に変更する背景には、高校の授業が知識伝達型にとどまっており、卒業後の大学での勉強や社会に出てからの生活に役立つものになっていないという現実に対する教育関係者の危機感があり、自ら考えさせるアクティブ・ラーニングという手法が海外同様に必要だと両氏も改革を応援する。

先般問題となった、防衛省の文書隠蔽、財務省の文書改ざんや官僚のセクハラなどは、偏差値至上主義教育の弊害が霞が関の劣化として顕在化したものだと佐藤氏は指摘する。

AI時代を見据えた教育とは、AIにまねのできない力を育むためにどうするのかを考え実行すべきであることは明白と池上氏も指摘する。

日本の18歳人口は1992年の205万人をピークに減少。現在は120万人くらいになっているが、大学は90年前後は約500校だったが現在は800校近くになっており大学の淘汰もやむを得ない。使えないロシア語を教えている大学の授業などは見直しが必要だそうだ。

人は誰しも教育に関しては言うべきことを持っている。それは皆過去に教育をうけてきた体験があるからだが、その経験は過去のもので今はすっかり変わってしまったことを知らないままの論議も多いと著者たちは指摘する。韓国の問題を考えても、教育の大切さは改めて見直されているのではないだろうか。教育について考えるきっかけになる一冊と推奨したい。

(シニアネットワーク会員 齋藤 隆)

エネルギーレビュー誌の書評欄 2019年11月号掲載